

第18回大会講演要旨（平成18年12月16日）

歴史における事実と虚構 — 『井関隆子日記』の記述から —

前昭和女子大学教授 深 沢 秋 男

一、はじめに

近代的な国語辞典の最初の名著、大槻文彦の『大言海』は「文学」の語の意味に、小説・詩歌などと共に「歴史」を含めている。これは決して誤りではない。現在、私達は、歴史と文学を別の学問として扱っているが、それは研究が進み細分化されたという事に過ぎない。

歴史学とは、過ぎ去った時代の、我々の先祖が、それぞれの時代において、どんな事を行い、どんなモノを後世に伝えたか、そして、それは、人類の歴史において、どんな意味をもっているか、それを解明する学問であり、それは、あくまでも、残された事実に基づくもので無ければならない。その点で、フィクションが中心になる文学とは異なる。しかし、文学は時として、過去の出来事の背後にひそむ真実を伝えている事がある。

二、『井関隆子日記』（昭和女子大学図書館蔵）について

昭和女子大学図書館・桜山文庫には『井関隆子日記』が所蔵されている。著者自筆の写本、十二冊、全九六六葉。著者は、井関隆子（いせき・たかこ、一七八五～一八四四）で、旗本の主婦である。『日記』は晩年の五年間（一八四〇～四四）に互って記されている。その内容は、その日の天候、四季折々の自然の変化、日々の出来事、様々な見聞、当時の風俗・習慣、年中行事、幼い頃の思い出、人物・社会・政治・学問・文学等に対する批評、折々に詠じた和歌などが、著者の意のおもむくままに記されている。

殊に、この『日記』の特色は、徳川幕府の動静や江戸城中の様子が具体的に、また比較的に正確に記録されている事である。それは、著者の子の親経（ちかつね）や孫の親賢（ちかかた）が、將軍や大奥に深く関わる係を担当していて、その情報を隆子に、詳細に、また正確に伝えていたからであろう。

三、『井関隆子日記』に見られる天保期の歴史的記述

天保十一年（一十五）年の社会状況は、近世の歴史の上から見ても、激動の時代であった。天保十二年閏一月に第十一代將軍・家斉が没するのと前後して、首席老中・水野忠邦を中心とする幕府首脳は、天保の改革に着手した。十一年十一月の三方所替、十二年四月の家斉側近の罷免、十四年三月の日光社参、同年六月の印旛沼干拓工事、同年八月の上知令などを次々と行つたが、これらの諸政策実施の様子が、『井関隆子日記』には極めて具体的に記されている。

四、第十一代將軍・徳川家斉の没日をめぐって

第十一代徳川將軍・家斉の没日は、天保十二年閏一月晦日が通説である。それは、徳川幕府の正史ともいうべき、『徳川実紀』『徳川幕府家譜』『柳営日次記』等がそのように記録しているからである。しかし、井関隆子は、『日記』の閏二月十日の条で、西の丸の大殿・家斉は、久しく病氣勝ちであつたが、昨年の暮から特に重体となり、年の初めまでもつだらうかと、皆心配していたが、ついに閏一月七日の夕方に他界されたという事である、と記している。

徳川家斉の没日は、天保十二年閏一月七日没、というのが、歴史上の事実であつたようである。しかし、十二代將軍・家慶はじめ、徳川幕閣らは、家斉の死を伏せて、菩提寺の寛永寺に祈祷料として銀五百枚を与えて、葬儀の準備をさせ、御三家・御三卿の当主も江戸に集まり、次期政権の準備も万事整えて、閏一月晦日に家斉の死

を公表した。これが、歴史上の事実であつたらしい。

徳川幕府の公式の記録とも言うべき諸史料に、このような、事実とは異なる事が記され、その虚構の記録に拠つて歴史が認識されて後世へ伝えられている。しかし、他方では一人の旗本夫人の私的な日記に、歴史の事実が記録され、同様に後世へ伝えられる訳である。

五、おわりに

徳川幕府は、三百年という長い間、日本を統治してきた。巨大な組織を機能的に円滑に運営しようとする時、様々な虚構をつくり出した。このような事が、明治以降の日本の国家組織に無いと言えるだろうか。歴史研究は、これらの事実を突き止め、その背後にある真実へ迫る任務があるように思う。